オープンガーデンの継続的運営における諸課題

── 関東エリアのインタビュー調査をもとに ──

土屋　　薫*・林　　香織**・崎本　武志***

要　約

日本のオープンガーデンは，「自宅の庭を無料で公開する」という一点で共通しているものの，地域によって運営主体や手法，目的が異なっている。そのため，課題の把握と対処の仕方も場渡り的にならざるを得なかった。先進事例を対象とした調査研究によって，主催者別に3類型化できることはわかっているが，データの観点から本格的に妥当性と信頼性が検証されておらず，理論モデル化には至っていない。そこで関東エリアから「深谷」「小平」「大磯」という3つの代表的なオープンガーデンを取り上げ，インタビュー調査を行ったところ，新たに地縁と趣味縁という分析軸が得られた。今後，各地のオープンガーデンのインタビュー調査を進めていきながら，最終的に全国のオープンガーデンを対象としたデータ取得（悉皆調査）を行うことができれば，オープンガーデン活動のモデルが構築できるとともに，オープンガーデンの継続的運営を検討することが可能になることが明らかになった。

キーワード：地縁，趣味縁，関係人口

はじめに

本研究グループはこれまで，社会調査を用いて，日本のオープンガーデン活動が，趣味としてのガーデニングと地域に根ざした活動の両者に立脚していることを示した（土屋・木村・林 2009）。またオープンガーデンの場では，庭のオーナーと訪問者の両者が「趣味」を通じた緩やかな関係性を築いており，その関係性こそ，オーナーにとって公開継続の動機づけとなっていることを明らかにした（土屋 2010・2011）。

しかしながらオーナーと訪問者との間には，庭を公開する主旨やガーデニングに対する知識量等のギャップが存在し，それが両者のコミュニケーションの阻害要因となっている（林 2012）。そこで，オーナーが訪問者との間で交換を望まない経路情報等を地図で可視化するなどのオーナーへのフォローが必要なこと（林 2015），オーナーのライフヒストリーに関わる情報が庭の「見どころ」に関わる両者のギャップを埋めること（林・土屋 2018）を明らかにし，オープンガーデンを持続可能な観光資源とするための条件を模索してきた。

オープンガーデン発祥の地であるイギリスでは，オープンガーデンはチャリティを目的とし，NGS（National Garden Scheme：ナショナルガーデンスキーム）という1つの団体によって統括されている。これに対して日本のオープンガーデンは，「自宅の庭を無料で公開する」という一点で共通しているものの，地域によって運営主体や手法，目的が異なっている。そのため，課題の把握と対処の仕方も場渡り的にならざるを得なかった。そこで筆者らは，先行研究の多い3地点を日

2019年11月30日受付
* 江戸川大学　現代社会学科教授　レジャー社会学
** 江戸川大学　マス・コミュニケーション学科准教授　余暇・生活文化論
*** 江戸川大学　現代社会学科教授　観光産業論，ホスピタリティ・マネジメント

本のオープンガーデンの先進事例と捉えた調査研究から3つの型を導き出した。これに日本全国のオープンガーデンを主催者別に当てはめたところ3類型化できることがわかった（土屋・林・下嶋・宮崎 2017）。これは庭の継続的公開に関する諸課題に系統的対処ができる条件が整ったことを意味する。しかしながらこの3類型は，ケーススタディとして検討されているに過ぎず，データの観点から本格的に妥当性と信頼性が検証されているとは言えず，理論モデル化には至っていない。

1. 先行研究の整理

日本におけるオープンガーデンに関する研究は，「私的な空間である庭園」を開放することによる空間の「公共性」を分析軸として，造園学や都市計画の分野で展開されてきた（相田・進士 2001）。ただその後も，経済波及効果や主催する市民団体・行政の役割等の記述的研究が中心で（平田・橘・望月 2003，岩瀬・上甫木 2007，朴・野中 2009，三分一・湯沢 2010），庭を公開する理由や公開を継続する要因といったオーナーの特性自体に関する研究は多くない（朴・野中 2010）。

またオープンガーデンは，いわゆる観光地ではない一般の住宅街に交流人口や関係人口を創出しており，公開するオーナーの都合でプログラムが組み立てられている。その点で着地型観光の資源として着目できる。しかしながら，逆に経済活動の入り込む余地が乏しいため，観光DMO（Destination Management Organization）を対象とするような地域の利益享受者の合意形成に関わる研究対象からは除外せざるを得ない（大野 2016，金井・峯俊 2017）。その意味で，長崎さるく博に端を発する「まち歩き観光」の資源としてオープンガーデンを位置づけている研究はほとんど見られない（金 2017，小池 2018）。

それから唯一，本研究グループにおける先行研究においてのみオープンガーデン活動の構造把握が試みられているので，ここではその枠組みを整理しておきたい。

土屋によれば，レジャー活動への参加状況を比較した時，全国都市部の一般サンプルとオープンガーデン活動参加者とでは明らかに傾向が異なり，オープンガーデン活動参加者は地域属性が異なっていても同じ傾向を示すという（北海道恵庭市・長野県小布施町・千葉県流山市のサンプルにおいては，明らかにメディア型および消費型のレジャー活動の参加度が低くなっている，土屋 2015）。さらに，レジャー活動の選好度においては同質なこれら3つのサンプル内においても，レジャー活動に対する満足度の外延を捉える尺度である余暇退屈度（Leisure Boredom Scale）で測定してみると，全く異なる傾向が出てくるという（同 2015）。

土屋はここから北米大陸におけるサンプルとは異なる日本独自のレジャー活動の満足度に影響するサブスケールを見出し（渋谷・土屋 2001，土屋 2006），レジャー活動時に求める情報の違いとして説明している。そしてその根拠をオープンガーデンの運営主体に求め，上記3地点のサンプルによる違いを定位した（土屋・林・下嶋・宮崎 2016）。しかしながら，その特性の違いが運営主体に由来するものなのか，地域特性によるものなのか，というところまでは検証に至っていない。

2. 質的調査概要

そこで本研究では，関東エリアを中心に，オープンガーデンの開始年が早く，当該エリアにおいて中心的かつ規模が大きく，なおかつ運営主体が異なるという観点から，「深谷オープンガーデン」「小平オープンガーデン」「大磯オープンガーデン」の3つのオープンガーデンの調査を行うこととした。以下，それぞれのところであらためて示すが，行政の関わりが大きい「深谷」と様々な組織が関わっている「小平」，そして民間主導で実施している「大磯」という区分となる。

なお，各オープンガーデンの運営，主催者，積極的に関わりを持つ方に対して，半構造化インタビューを行った。調査時期とインタビュー場所，調査協力者名は下記に示した。

深谷オープンガーデン：2019年5月27日　埼

玉県深谷市「緑の王国」事務所
「深谷オープンガーデン　花仲間（以後，花仲間）」代表　栗原實様ご夫妻
前 花仲間代表　嶋村秀子様
花仲間　広報担当　池澤理恵子様
花仲間　会員　里見優様　計５名
大磯オープンガーデン：2019 年 6 月 10 日　神奈川県大磯町　大磯町観光協会
大磯町観光協会専務理事
石井晴夫様　計１名
2019 年 7 月 8 日　神奈川県大磯町
大倉祥子様宅
大磯町観光協会会長　大倉祥子様
大磯町観光協会専務理事
石井晴夫様　計２名
小平オープンガーデン：2019 年 7 月 4 日　東京都小平市　こだいら観光まちづくり協会
こだいら観光まちづくり協会　まち巡り室
石川純様
こだいら観光まちづくり協会
菊池いづみ様　計２名
2019 年 7 月 4 日　東京都小平市
森田様　計１名

質問項目は，大きく分けて，主催者の特性，情報提供，観光との関わりの３つの項目に類別できる。それを細かく見たものが下記８項目となっている。

1. 個人の趣味としてのガーデニング履歴（主催者特性）
2. オープンガーデンの動機（主催者特性）
3. オープンガーデンの運営に携わるきっかけ（主催者特性）
4. オープンガーデンの運営に関連する問題点（主催者特性）
5. オープンガーデンの情報発信方法（情報提供）
6. 観光の側面から見たオープンガーデンの考え方（観光との関わり）
7. オープンガーデンと行政の関わり（主催者特性）
8. オープンガーデンの今後（主催者特性，情報提供，観光との関わり）

各オープンガーデンの概要を記しておく。

2-1. 深谷オープンガーデン

埼玉県深谷市は，人口 14 万 4,425 人[1] の埼玉県北部に位置する都市である。2006 年，いわゆる平成の大合併の際，旧深谷市と大里郡岡部町，川本町，花園町が合併し，現在の深谷市が形成されている。日本の近代産業の父，渋沢栄一の故郷として知られ，深谷ねぎなどの農産物が特産品として挙げられる。2004 年に策定された「ガーデンシティふかや構想」は，「愛する（花を愛し，緑を愛し，『ふかや』を愛する心を育む）」「創る（美しくなければ街でないをモットーに，花と緑のあふれるまちを創る）」「育む（現存する自然緑地・生産緑地を守り育み，自然と共存するまちづくりを推進する）」の３つのキーワードを柱に，「心やすらぐ　花と緑のまち」づくりを推進することを目的としている[2]。

市内の花と緑の愛好家が集まり，「ガーデンシティふかや構想」が策定された同年の 2004 年に「深谷オープンガーデン　花仲間（以後，花仲間）」が発足された。この花仲間が「会員の庭を公開することで交流を深め，生活を潤わせ，街を活性化すること」を狙いとして始めたのが「深谷オープンガーデン」[3] で，現在の運営主体である。2019 年現在までに，7 冊のオープンガーデンブックが発行され，掲載庭数も 69 件（2019 年 3 月現在）を数える。毎年 4～5 月にかけて，「第 16 回ふかや花フェスタ＆オープンガーデンフェスタ」といったイベントとして統一的に公開する日が設けられている。オープンガーデンのみならず，素敵なお庭づくりをしているオーナーのマスメディアへの露出も多く，深谷＝ガーデニングの街というイメージが浸透しつつあり，町づくりへの影響の側面も強い。

2-2. 大磯オープンガーデン

神奈川県大磯町は，人口３万 1,467 人[4] の神奈

川県南部に位置する町である。1885（明治18）年に松本順が大磯海水浴場を開設したのを機に，鉄道の開通によって著名人が保養・療養の目的で長期滞在や別荘を建築するようになったことから，「明治政界の奥座敷」と称されるようになった。2018年は，明治元年である1868年から起算して満150年にあたり，内閣官房と地方公共団体，民間企業が一体となって「明治150年」の記念イベントを数多く開催した[5]。大磯では，通常一般公開されていない大隈重信，陸奥宗光，伊藤博文などの別邸が公開され注目を集めた。

大磯オープンガーデンは，2006年から開始され，「おおいそオープンガーデン運営委員会」を中心に，共催：大磯町商工会，おおいそオープンガーデンホーム運営委員会，（公社）大磯町観光協会，後援：大磯町，（公財）神奈川県公園協会，（公社）日本家庭園芸普及協会，（公社）園芸文化協会株式会社，協賛：ハイポネックス・ジャパン，大磯迎賓館，協力：（NPO）大磯ガイド協会，大磯まちづくり会議により開催されている[6]。毎年4～5月にそれぞれ3日程度，統一公開日が設けられている。特徴的なのは公開件数の多さで，2019年には130件程度の規模で，半数はショップとなっている。オープンガーデンを巡りながら，大磯土産を購入できるなど，商工会のイベントとして開始された側面の影響がみられ，オープンガーデンと同時に「大磯アフタヌーンティー（主催：大磯町新たな観光の核づくり推進協議会）が開催されている。町内のカフェでオープンガーデンの期間限定のオリジナルメニューが楽しめるもので，観光協会のリーダーシップが強く，オープンガーデンが観光を主体とした町づくり，環境整備と深く結びついている。

2-3. 小平オープンガーデン

東京都小平市は，人口19万1,308人[7]の東京都多摩地域北部に位置する市である。もともとは水が乏しく，生活には適さないエリアだったものの，1654年玉川上水の開通がきっかけで開拓が始まり，江戸の近郊農村として出発し，青梅街道などの主要街道を中心に開発が進んだ結果，戦後には都心のベッドタウンとして人口が増加してきた[8]。現在も玉川上水，に加え，野火止用水，狭山・境緑道を結ぶ，水と緑にあふれた散歩道「グリーンロード」を中心に見どころが多い。

2008年に始まったオープンガーデンは，2005年から開始された「花と緑のこだいらガーデニングコンテスト」から「楽しい催しを年間を通して展開できないだろうか」という発想から始まったという[9]。現在は主催：小平市グリーンロード推進協議会，小平市，小平市園芸組合，小平商工会，JAむさし小平支店で開催されている。こだいら観光まちづくり協会が発行する「小平グリーンロード＆オープンガーデン」に掲載されている庭数は，個人宅，ショップ含めて2019年は27件，開催当初は15件の登録だったため，活動が拡大していることが伺える。統一公開日などは設けられておらず，公開期間も通年から1か月のみの公開まで幅があるなど，場所により解放日が異なっている。街道沿いの花壇や駅前花壇など，ボランティアによって整備されている場所も楽しむことができるなど，わざわざ見に行くというより，地元市民にとっては環境に溶け込んだオープンガーデンであるといえる。

3. 調査結果

では，各オープンガーデンについての調査結果をみていくことにする。なお，ここに掲載したものは，調査協力者の発言を筆者らがまとめたものであることを付記しておく。

3-1. 深　谷

・2003年にガーデンシティ推進室が設置され，2004年2月に市から声がかかって結成されたのが，花仲間。
・さいたま国体に併せて，ガーデンサミットが開催されることになり，そのタイミングで2004年，2006年にガイドブックを発行することになった。2013年から現在の形で発行を継続中。
・市からの支援金はないが，広報ツールとして

オープンガーデンの庭にたてる旗を支給するなどのバックアップをしてくれている。市との連携はちょうどよい距離感だと思っている。
・深谷市のオープンガーデンは場所が点在しているが，バスやタクシー会社がオープンガーデンをめぐるプランを出してくれるなど，協力的。
・深谷市内には園芸に関わるお店が多く，市内で花の栽培に関するものは他の地域よりも安く手に入れられるのもガーデニングが盛んな理由。
・もともとは，和風の植木屋さんが多かったが，洋風のテイストも増えている。
・オープンガーデンを始め，ガーデニングの街というイメージが強く，福島で被災後に，移住するなら深谷だと決めて，移住し，オープンガーデンに参加している。
・足利や熊谷など県内だけでなく，台湾や上海からも訪問客が来ている。
・会員の庭をめぐるツアーを開催しているが，他の人の庭を見るのは楽しい。
・現在は定例会を第1火曜日とし，運営委員会も開催している。
・会員との交流は，お花の話ができるのが楽しみ。
・種まき講習会，多肉植物の育て方，ハンギング，草木染めなど，多数の企画を開催してきたが，企画は思いついたらやってみる方式。やりたいことには情熱が傾けられるので，それが企画運営の原動力になっている。

深谷市のオープンガーデンは，2004年に策定された「ガーデンシティふかや構想」と連動しており，補助金ではなく，オープンガーデン運営者である花仲間に活動の場所（緑の王国）を提供するなどのバックアップを行っていることがわかる。現場は，花や緑を育てるのが好きな，情熱のある人に任されており，みなそれぞれが自分の特性を生かして，企画を立てて運営するなど，楽しんでいる様子が見受けられ，特徴的だと感じられた。運営に携わるという感覚よりは，むしろ運営に関わることでより情報が交換されるといったポジティブなネットワークが展開されている。個人宅の庭というプライベート空間のみならず，緑の王国のデザインや手入れといったことに参加していることも，オープンガーデンを継続していくモチベーションにつながっていると考えられる。

3-2. 大　磯

・大磯には8人の元首相や旧財閥系の大きな庭があり「別荘文化」と呼べるようなものがある。
・2006年のスタート時には，県が湘南邸宅文化再生構想計画を練っており，オープンガーデンはそれら旧来の庭公開に向けた，前提とも呼べる位置づけの事業だった。
・個人的には，7，8年前の70軒くらいが適正規模だと思う。
・来訪者の満足感や期待感を得たいが，拡大路線は修正したい。
・パンフレットは商工会が県から得た補助金で作成しているが，そもそも広告を集められる企業が少ない。
・ガーデニングは，自分の庭に花や草をつかって絵を描くようなイメージ。とてもプライベートな空間。それを「見せる」ということは，1年間頑張った成果を「見せる」という感覚に近いのではないか。
・来てくださったお客様とお話するのは楽しい。特に相手もガーデナーである場合，庭談義や花談義で盛り上がる。花や苗をプレゼントすることもある。一方で，「ここは花がないのね」など庭のオーナーが傷つくようなことを平気で言う人もいれば，「オープンガーデンなのに（対応してくれる人が）誰もいない」と文句を言う人もいる。
・大磯のオープンガーデンは公開庭数が多いが，当初は全域に広げるつもりはなかった。マップに写真を入れどのような庭かわかりやすくなったこと，「コンテナ一つで参加できる」とハードルを低くしたことで，参加者が

増加したと感じる。

・元々観光地であること，商工会の事業の一環だったことから，お店に声をかけ，現在も半数はお店。

・数の増加に伴い，「オープンガーデン（オープンで中に入れる）」「ストリートガーデン（外から見学可）」「店さきガーデン（お花を飾っているお店）」の3種類に庭を分けることになった。

・オープンガーデンを運営しているのは，オープンガーデンホーム運営委員会（大磯町商工会内）

・オーナー同士で交流したいが，人数が増えすぎて，案内を郵送するだけでも手間がかかる。個人的な交流はある。

・オープンガーデンの申し込み時に「運営のお手伝いをする」にチェックを入れてもらう形式で運営者を募るが，世話役になりたい人は少ないため，お金を払ってでも事務局が欲しいと思っている。

・若い人（30～40代）の人たちに，私も参加したいと思ってもらえるようになっていきたい。年齢その他の関係で，公開をやめる人も出てきている。

大磯のオープンガーデンは，行政主体ではなく，観光協会が協力なリーダーシップをとって運営をしている。オーナー同士のつながりが強固なわけではないものの，個人的なネットワークが，その運営を支えている。現代のオープンガーデン＝イングリッシュガーデンといった形で発展してきているものの，「政界の奥座敷」である大磯町には素晴らしい日本庭園があり，こうした観光資源との親和性を図っていくような展開も予想できる。

運営に関わる方たちはみな大磯町の将来を考え，もっとよくしていこうと汗をかいている一方で，マップ作成のための資金などが補助金で助成されるといったことはないことがわかった。

3-3. 小　平

・小平市には観光課がなく，現在は一般社団法人こだいら観光まちづくり協会（2016年設立）がその役割を担っている。

・オープンガーデンの運営はもともと市が担っていたが，上記協会の立ち上げとともに，市から受け継ぐことになった。

・見どころは，21㎞あるグリーンロード，日本で一番数が残っている丸ポスト，ブルーベリーを最初に栽培したのも小平なので，ブルーベリーの収穫体験など。最近は，鈴木遺跡（旧石器時代の遺跡）が国指定になったので，力を入れていきたい。

・観光協会は，市内の見どころをめぐるまち歩きのプログラムを月に1回企画運営。そのコース内にオープンガーデンの公開庭があると立ち寄る場合がある。

・最も早くからかかわっているのは，森田さん。

・小平のオープンガーデンは，オーナー同士の交流はあまりない。

・オーナーから訪問者のマナーについてのクレームがある。例えば，勝手にバスで50人くらい一気に見に来て，おもてなしの準備をしたら10分で帰ってしまったとか，敷地内に勝手に侵入されたといったこと。

・オープンガーデンマップには工夫を凝らしている。地図が好きな職員が航空写真から手書きに起こしている。ただ，1年に1回出すという計画にはなっておらず，現在までに2冊のマップを出してはいるが，次年度3冊目の計画はまだない。

・小学生の頃からお花が好きだった。人をおもてなしするのも好き。

・オープンガーデンは市の依頼で始まった。

・オーナーで集まる機会はあまりない。

・訪問してくださる方とは，お花の情報を交換するだけでなく，様々な話をする。土日はお客様がたくさんいらっしゃるし，日本全国から訪問してくださる。

・訪問してくださる方に，自宅に庭で栽培して

いるカモミールをハーブティーとしてお菓子をつけて200円で提供している。ご近所の方が育てた野菜やなども販売している。利益を出すためではなく，福祉に寄付（東日本大震災の被災地や子どもの支援）している。

・NHK第一ラジオ「深夜便」に出演したところ，沖縄や名古屋などからの反応があった。雑誌「オレンジページ」の2020年2・3月のカレンダーに庭の写真が採用される予定。

・個人だけでなく，60名くらいの団体もいらっしゃることがあるし，近所のお友達を招くこともある。

小平市は，深谷市や大磯町のような観光資源を豊富に抱えているわけではない。が，町の現在の景観に馴染むタイプのオープンガーデンが展開されており，環境とマッチしたイベントであるといえる。オーナー同士の交流がないため，オーナーが庭を公開するモチベーションをどう保てるかが今後の継続の鍵になると考えられる。

4. 地縁と趣味縁という分析軸

調査結果を整理してみると，今回調査した3つのオープンガーデンは，地縁と趣味縁という要素とその強弱，そしてそれらの間の関係性によって位置づけられることがわかった。

すなわち深谷のオープンガーデンは，行政の関与する地縁を中心としており，趣味縁が地縁を支える形で運営されている。実際にオープンガーデンをやっているという理由から深谷を選んで転居してきた事例も確認されている。また大磯のオープンガーデンでは，同じ地縁であっても個人のネットワークを中心としたもので行政の関与はほとんどなく，趣味へ収斂していく（庭やガーデニング自体の質的向上を目指す）訳ではないことが確認された。さらに小平では，オープンガーデンに参加している庭のオーナー同士のコミュニケーションが乏しく，その意味では趣味縁としてはきわめて微小で，かといってまちづくりや地域づくりとしてではなく，自宅周辺の生活環境整備を視野に入れた活動としてオープンガーデン活動が展開されていることがわかった。

まとめと今後の展望

本研究で明らかになったのは以下の点である。

1. オープンガーデンの特性を捉える指標として，地縁志向と趣味縁志向が想定される
2. 2つの軸を用いると，今回インタビューした3つのオープンガーデンは，下記のマトリックスで整理される

表1　地縁志向と趣味志向

	地縁志向	趣味縁志向	備考
深谷	高	高	地縁＞趣味縁
大磯	低	低	―
小平	高	低	―

今後の展望として，上記の諸点を確認する上で各地のオープンガーデンのインタビュー調査を進めていくということ，そしてそれを元に全国のオープンガーデンを対象としたデータ取得（悉皆調査）を行うことが求められる。その延長線上にこそオープンガーデン活動のモデルが構築できるとともに，オープンガーデンの継続的運営が検討可能になると思われる。

またその際には，趣味縁と地縁だけでなく，新たな分析軸を想定する必要があるかもしれない。なぜなら，消費社会におけるオープンガーデン見学の位置づけが「観光以上移住未満」であり，その意味で，交流人口ではなく関係人口としてカウントされるべきことが予想されるからである。

《注》

（1）　深谷市役所ホームページ　2017年4月現在の統計データ
http://www.city.fukaya.saitama.jp/shisei/tokei/1391577438846.html（2019.11.27）

（2）　同webサイト　http://www.city.fukaya.saitama.jp/fukayahanaweb/koso.html（2019.11.27）

（3）『Fukaya Open Garden Book 2019』p. 3

（4）　大磯町公式ホームページ　平成30年10月1日

現在のデータ
http://www.town.oiso.kanagawa.jp/gyosei/toukei/toukei_jyouhou/toukei_oiso/1553493886078.html（2019.11.27）

（5） 明治150年ポータルサイト
http://www.kantei.go.jp/jp/singi/meiji150/portal/（2019.11.27）

（6） 大磯オープンガーデン公式サイト2019
https://open-garden-oiso.wixsite.com/home（2019.11.27）

（7） 東京都小平市公式ホームページ　平成30年1月1日現在のデータ
https://www.city.kodaira.tokyo.jp/kurashi/000/000535.html（2019.11.27）

（8） 小平市役所ホームページ
https://www.city.kodaira.tokyo.jp/kurashi/001/001140.html（2019.11.27）

（9） 小平シニアネットクラブ
http://www.ksnc.jp/kodairashoukai/opengarden/opengarden1.htm（2019.11.27）

参考文献

相田明・進士五十八，2001，先駆的事例を通じた我が国におけるオープンガーデンの意義，東京農大農学集報，46（3），154-165

林香織，2012，オープンガーデン訪問者のメディア利用と訪問ルートの相関 ── 流山市江戸川台地区を事例に ──，江戸川大学紀要22，211-217

林香織・土屋薫，2018，撮影者の視点からみる観光資源としてのオープンガーデン ── オーナーとボランティアガイドの視点比較 ──，江戸川大学紀要28，231-241

林香織，2013，オープンガーデン訪問者のメディア利用と訪問ルートの相関，江戸川大学紀要23，127-132

林香織，2015，観光情報の類別に地域資源が与える影響 ── 流山市，小布施町，恵庭市のオープンガーデンの比較から ──，江戸川大学紀要25，215-227

平田富士男・橘俊光・望月昭，2003，わが国におけるオープンガーデンの地域経済への波及効果量の把握に関する研究，ランドスケープ研究，66（5），779-782

岩瀬英恵・上甫木昭春，2007，兵庫県三田市におけるオープンガーデンの活動と会員の意識・行動の変化に関する研究，ランドスケープ研究，70（5），657-662

金井萬造・峯俊智穂，2017，着地型観光の手法から地域連携交流事業としての展開へ向けた考察 ── 地域活性化と観光事業の地域レベルでのDMO形成 ──，第32回日本観光研究学会全国大会学術論文集，253-256

金明柱，2017，まち歩き観光に参加するとは何か ── 長崎さるく10年間の変化から ──，第32回日本観光研究学会全国大会学術論文集，277-280

小池拓矢，2018，東京・小平市におけるオープンガーデンの活用と地域資源との連携，ツーリズムの地理学，二宮書店

大野富彦，2016，DMOの境界と合意形成プロセス ── 観光地域づくりにおける重層的な場について ──，第31回日本観光研究学会全国大会学術論文集

朴恵恩・野中勝利，2009，オープンガーデンにおける活動組織と支援組織との関係及びその影響に関する研究，日本都市計画学会都市計画論文集，44（3），691-696

朴恵恩・野中勝利，2010，オープンガーデンにおけるきっかけと期間を視点とした活動実態から見た継続性，日本建築学会計画系論文集，75（648），427-435

三分一淳・湯沢明，2010，自宅お庭の維持管理と開放・閉鎖する意識の際に関する検討，日本建築学会計画系論文集，75（647），129-138

渋谷泰秀・土屋薫，2001，青森市における余暇退屈度の特性，研究紀要24（2），42-68

土屋薫，2006，豊かさを感じる「技術」に関する考察 ── レジャー行動モデルからのアプローチ ──，江戸川大学紀要16，41-49

土屋薫，2010，着地型観光におけるニーズのマッチングに関する基礎的研究 ── 千葉県流山市におけるオープンガーデンを事例として ──，レジャー・レクリエーション研究65，28-31

土屋薫，2011，レジャー論から見た「オープンガーデン」に関する一考察 ── 千葉県流山市を事例として ──，江戸川大学紀要21，211-217

土屋薫，2015，オープンガーデンにおける交換過程に関する考察 ── 着地型観光における交流の構造把握に向けて ──，江戸川大学紀要25，25-33

土屋薫・林香里・下嶋聖・宮崎雅代，2015，オープンガーデンに見られる趣味縁の可能性に関する考察 ── レジャー活動を通じた豊かさの指標づくりに向けて ──，レジャー・レクリエーション研究，75，3-19

土屋薫・林香里・下嶋聖・宮崎雅代，2016，運営主体から見たオープンガーデンの差異に関する研究，レジャー・レクリエーション研究，79，21-40

土屋薫・木村文香・林香織，2009，学際的アプローチによる地域研究 ── 流山コミュニティモデルの構築と大学の役割 ──，江戸川大学学内共同研究報告書，1-9